SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

インターネットを利用した哲学研究のために：フッサール・データベースの新段階

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜渦, 辰二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006870

インターネットを利用した哲学研究のために
——フッサール・データベースの新段階——

浜　渦　辰　二

はじめに

「哲学にとってスピードに何の意味があると言うんだ？」——これは、わたしが昨年9月末にドイツのフライブルクで行われた或る研究会に参加した際、わたしがこの間携わってきたフッサール・データベースのことを説明した時に、パリから来た新進気鋭の若き研究者が苛立たしげに示した反応である。

もちろん、ここで「スピード」といっているのは、「哲学する」ことあるいは「思索する」ことのスピードのことを言っているのではない。「思索のスピード」があって、一瞬のうちにいろいろな可能性と広い射程を視野に入れて物事を思索することができる、要するに「頭の回転が早い」のは、必要条件ではないにしても、どちらかと言えば、「反応が鈍い」ことよりいい。このことは、哲学する者にとってもやはり当てはまるだろう。しかし、ここで言っているのは、そのような「哲学にとってのスピード」ではない。では、どんな「スピード」なのだろうか。

それは、第一に、哲学におけるコンピュータの利用に関わる問いである。コンピュータは、理系のみならず文系の学問分野においても、「情報（データ）処理のスピード」によって大いに利用価値が広がって来ている。しかし、そのことが哲学にとって何の意味があるのか、というのが先の問いの第一の論点であった。確かに、文書作成および清書にとって、ワープロやパソコンが果たした役割は大きく、いまや、哲学の分野においても、論文をワープロあるいはパソコンで書く人の割合は、ますます大きくなってきている。それはそれなりに、便利な筆記用具として、哲学に限らず、文章を書く必要のあるすべての分野で役立っていると言えよう。しかし、便利な筆記用具として以上に、情報処理のスピードということが、哲学にとって何の役に立つのか。表計算をするわけで

も統計処理をするわけでもない哲学の分野において何の意味があるのか。これが第一の問いである。

また、冒頭の反応は第二に、「新しい情報を得るスピード」に関わる問いであり、つまり、「哲学にとって、新しい情報を早く手に入れるということが、何の意味があるのか？」という問いだった。確かに、哲学の問題というのは新しいようでいて古くからある、と言われる。哲学史は進歩の歴史ではなく、古くからある問題が新しい意匠を凝らして再登場するだけで、場合によってはすべてが「プラトンの著作の注釈」だと言われることすらある。哲学の意義が問題の解決そのものにではなく、むしろ問題を提起することにあるとすると、その感はなおさらであろう。最新の哲学情報をできるだけ早く得ることに意義を見出すのは、哲学雑誌の編集者か、ヨーロッパ哲学の最新事情を日本に紹介しようとする研究者だけであろう。この問いは、現在最先端の国際的電子メディアであるインターネットにも関わるもので、哲学にとって、最新の情報が一瞬のうちに世界を駆け巡るというインターネットが何の役に立つというのだ、という問いともなる。これが第二の問いである。

さて、わたしがここ数年、共同研究者と多くの協力者達とともに取り組んできたフッサール・データベースの構築とインターネットによる公開(1)は、これら二つの「スピード」に関わる問いに対して、ともに「スピード」にそれなりの積極的な意義を見出そうとするものと言える。しかし、それはどういう意味においてであるか。小論は、この(1996年)4月にわたしたちのフッサール・データベースが迎えた新しい段階を紹介しつつ、このことにいくらかでも答えていこうとするものである。

(1) 拙稿「フッサール・データベースについて」(『人文論集』、第46号の1、1995年7月)「インターネットによるフッサール・データベースの公開」(『現象学年報11』、1996年1月)、「フッサール・データベースの現状報告」(『情報知識学会ニューズレター』、1996年2月)を参照されたい。1995年度の共同研究者は、谷徹(城西国際大学)、貫成人(埼玉大学)、和田渡(阪南大学)、水谷雅彦(神戸大学)であったが、そのほか協力者として、東北大学・東洋大学・早稲田大学・上智大学・学習院大学・御茶の水女子大学・静岡大学・大阪大学・関西大学・立命館大学・九州大学(順不同)といった多くの大学の学生・院生の諸君に大変お世話になった。この場を借りて、改めて感謝したい。

1．哲学にとってのスピード

哲学することにとって、自然の美しさや宇宙の不可思議に思いを潜めること、政治・経済の不調和や社会の不合理に怒りを覚えること、身近な他者のみならず縁遠い他者との対話に新鮮な驚きを見出すこと、自分自身のうちに潜む深淵に目を見張ること、これらすべてが重要であることは疑いないが、それと同時に、そしてそれらすべてと関連しつつ、やはりテキストを読むというのは欠くことのできない重要な作業であろう。テキストを一切読むことなしに哲学するということは、ソクラテスやイエスの時代ならともかく、現代においてはほとんど不可能であるように思われる。とりわけ、わたしのように、自らを「哲学者」と呼ぶのは気恥ずかしく、せいぜい「哲学研究者」と呼んでおきたい者には、やはり、過去の哲学者たちの残したテキストを読み漁り、彼らの哲学を吸収・消化しつつ、巨人の背を借りる小人のように、彼らの思索をほんの少し先に進めることができれば、それでも喜ぶべきと思われるのである。

そんなわたしがテキストを読みつつ研究を進めている時、しばしば生じる事態がある。例えば、フッサールの『イデーンⅠ』というテキストを読んでいるとしよう。空間の問題を論じている箇所があり、ふと、この『イデーンⅠ』のなかでどこかで「パースペクティヴ」という語が使われていたはずだ、ということを思い出す。この語は、「地平の現象学」ということを考える時、「背景」「方位（Orientierung）」「射映（Abschattung）」などとともに重要なタームとなる。それがこの書のなかでどんな脈絡で使われていたのか、「地平志向性が現象学において重要な役割を果たすことは『イデーンⅠ』において初めて明らかにされた」（XVII, 207 Fn.）[1]とフッサールが振り返って述べる、この『イデーンⅠ』のなかで、このタームがどう使われていたのかをもう一度見たいと思って、確かここの辺りだったがと思いながら探すのだが、いくら探してもみつからない。論文の締切が迫っていて、そこをもう一度確かめたいと思い、パラパラと焦って探せば探すほど見つからない。

さいわい、『フッサール全集』（*Husserliana*）の他の巻は、ほんのわずかの例外[2]を除いて、原則的には「人名索引」があっても「事項索引」はないなかで、この『イデーンⅠ』の巻（シューマン版、Husserliana Bd. III/1）だけは、ラントグレーベの作成したものとヴァルターの作成したものの二種類の「事項索引」がある。そこで、この「事項索引」を捜してみるが、ラントグレーベ版に

もヴァルター版にも「パースペクティヴ」の項は見当たらない。[3] 思えば、索引というのは、単純に出現頻度によって作成されるわけではなく（だとしたら、“ich”, “wir”, “er”, “ist” などが幅を効かすことになる）、たとえ出現頻度が少なくともそれがその哲学にとって重要であるなら、やはり索引に取り入れられるはずである。ということは、索引というのは、それを作成した人が何を重要と考えるかによって、取り上げられる事項が大きく異なってくることなる。だとすると、或る枠組み（パラダイム）においては重要と見なされなかったタームが、別の枠組み（パラダイム）のなかでは重要と見なされるということも大いにありうる。ラントグレーベもヴァルターもともに、「パースペクティヴ」というタームを重要なものと見なさなかったが、「地平の現象学」[4]という観点からするとこのタームが俄然クローズアップされることになる。そんな時には、既成のパラダイムのもとに作られた索引は役に立たなくなってしまうのである。後は、自分でテキストを追って調べるしかない。

さて、このような状況のなかに、電子テキストによる検索という事態を考えてみよう。機械可読化された（コンピュータで読むことができるようになった）電子テキスト[5]があれば、このような検索は一瞬のうちに行うことができる。原書にして本文が 359 頁ある『イデーン I』のテキスト全体のなかから「パースペクティブ」というタームが使われているすべての箇所を検索し、それを頁数と行数によって表示させるのは、わたしたちのシステムでは、10 秒足らずであろう。[6] 希望によって、すべての出現する行のテキストを前後 2 行（この行数は自由に設定できる）とともに表示させることもでき、これによって、それぞれのタームが使われている脈絡をおよそ摑むことができる。『イデーン I』のなかでは、「パースペクティヴ」というタームが 1 回だけしか出て来ないということを、コンピュータによらないで確認しようと思ったら、大変な時間と労力を要する。もちろん、そこで払うことになる時間と労力がやがて何かの役に立つことを否定するつもりはないが、さきほどのような締切を控えた仕事の時には、できれば無しで済ませたい時間と労力である。そうでない時でも、その時間と労力をかけて、別の時には役立つかも知れぬことをしているうちに、どういう考えでこんな作業をしていたのか分からなくなりかねない。比喩的に言えば、いざ或る本が見たいと思った時に手に入らなくて、注文して 2 ～ 3 ヵ月立たないとやって来ないというのでは、その本が届く頃には、何のためにこの本を注文したのか分からなくなっている、というのもわたしの場合よく起きる状況である。

『イデーンⅠ』で言えば、「地平」という語は8ヶ所で使われており、それがどういう脈絡かとか、「パースペクティヴ」という語は1回だけしか使われておらず、それがどういう脈絡かとかを確認するのならまだましな方で、同じ巻のなかに例えば「生世界 (Lebenswelt)」という語は一度も出てこないということを確認するのは、コンピュータによらないで調べようとすると、徒労感しか残らない作業となろう。ところが、場合によっては、このような作業が重要ということもありうる。例えば、フッサールが「超越論的」というタームを使い始めたのは或る時期からのことであり、それ以前には使っていなかった、ということを確定するのは、フッサール現象学の展開を考える時、必要な作業である。もちろん、「超越論的」というタームそのものは使っていないが、その考え方はすでにここで芽生えているというケースもあることは確かである。しかし、いつどこからこのタームを使い始め、それ以前には一切使っていなかったということを確認するのが重要であることに、変わりはない。そんな時、或るテキストのなかでフッサールは一度も「超越論的」というタームを使っていない、ということの確認にやはり意味があることになる。この作業は、コンピュータでやればさきほどとまったく同じ10秒足らずの出来事である。しかし、これを自分の眼で確かめようと思うと大変な作業なのである。

そんなことは哲学ではない！　と言われるかも知れない。まったくごもっともである。わたしもこんなことがそれ自体で哲学だとは思わない。しかし、高度な哲学的思索の根底に、あるいは控えめに言えば、「哲学研究者」としての高度な哲学研究の根底に、こういう地道な基礎作業が不可欠とは言わないまでも、重要な役割を果たすことはありうる。例えば、フッサール現象学の展開のなかで、しばしば、超越論的主観性というタームを中心とする『イデーンⅠ』の時期のフッサールと生世界というタームを中心とする『危機』の時期のフッサールが対比的に扱われることがある。それが大雑把な議論として間違いだとは思わない。しかし、もう少し詳しく、フッサールがいつどういう脈絡で「超越論的」という語を使い始め、どういう脈絡で使っていったか、また、いつどういう脈絡で「生世界」という語を使い始め、どういう脈絡で使っていったか、それをさまざまな未公刊草稿のなかに追っていくと、必ずしも、「超越論的」という時期から「生世界」という時期へと転回したというわけではないことがありありと見えてくる。そうなると、そもそも「超越論的」と「生世界」という対比のなかで考えられていたことが、場合によってはまったく新たな様相をもって現れてくることもありうる。その時には、「超越論的」についてと同様に、「生

世界」についても考え直さねばならなくなってくる。それは、場合によっては、フッサール現象学についての根本的な理解に関わる問題ともなりうるのである。[7]

もちろん、同じ作業はコンピュータを使わないでもできることである。しかし、このこと一つを論ずるために、もしいくつかの主要な（場合によっては自分に都合のいい）テキストだけで論じてしまったり、漠然とした印象論にとどまったりするのではなく、しっかりした裏付けのある議論を展開しようと思うなら、フッサールがさまざまなテーマについて迷路のような思索を書き留めている膨大な草稿群を初めから終わりまで読み通すということになりかねないが、それは大変な時間と労力となる。そういう比較的単純な作業こそコンピュータに任せてしまってもいいことで、もっと「高度な」哲学する作業のためにその時間と労力を使いたいとは、実は誰しも思うことなのではないだろうか。コンピュータを使えば、哲学するという営みそのものが簡略化されたり、単純化されたりするわけでは、決してない。哲学するという営みを大事にしたいからこそ、その基礎作業となるようなことをコンピュータに任せることができれば任せたい、これが哲学にとっても「スピード」がそれなりの意義をもつゆえんである。わたしたちが、フッサール・データベースを作りたいと考えたのも、このような「スピード」にそれなりの意義を見出すからであった。

(1) 『フッサール全集』からの引用は、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で略記する。

(2) 『フッサール全集』第24・25・27の各巻のみ、ささやかな事項索引が付けられている。

(3) 邦訳（渡邊二郎訳、1979/84年、みすず書房）にある事項索引も、ラントグレーベ版を訳したものであるから、同様に掲載されていない。シュトレーカー版については、後述する。

(4) 「地平の現象学」について、とりわけ、「現前の形而上学」というジャック・デリダのフッサール批判は、フッサールの「地平の現象学」という側面には当てはまらない、ということについては、拙著『フッサール間主観性の現象学』（創文社、1995年2月、特に第2部第8章）を参照されたい。また、ハイデガーがフッサール現象学を批判するときも、この「地平の現象学」という側面が見逃されていた、という点については、拙論「見えないものの現象学のために」（1996年3月25日、京都大学における現代哲学研究会にて口頭発表、近いうちに活字になる予定）で論じておいた。

(5) わたしたちのフッサール・データベースの場合、OCRソフトを使って電子テキストを作成したことについては、前掲拙稿「フッサール・データベースについて」を、また、その

他の電子テキストの入手方法については、前掲拙稿「フッサール・データベースの現状報告」を参照されたい。

(6) わたしたちは、まだ、『イデーンⅠ』をデータベース化してはいないが、わたしたちがすでにデータベース化しているもののうち、本文が670頁ある『間主観性の現象学Ⅲ』では、同じ作業のためにかかったのは12秒ほどであった。

(7) ここの辺りの論点についても、前掲拙著（特に、第1部第6章）を参照されたい。

2．哲学にとってのインターネット

さて、検索作業(しかも、最近ではワープロでも可能な単純な検索ではなく、膨大なテキスト全体の出現箇所の頁数・行数を一挙に表示するというような検索作業）がコンピュータによって楽になり速くなるということは分かったが、それが今や流行となっているインターネットとどう関係があるのか。最新のニュースやデータが世界中を飛び回るというインターネットが[1]そしてその「スピード」が、哲学にとって何の意味があるというのか。これが、第二の問いであった。

わたしたちのフッサール・データベース構築は、同時に公開を目指すものであった。例えばフッサールが『イデーンⅠ』というテキストのなかで「地平」という語を何回、しかも、どういう脈絡で使っているのか、こういう検索結果は、フッサール現象学を研究する誰もが共有していて（あるいは、誰もがいつでも利用できる状態になっていて）いいものである。一生懸命汗水たらして調べ上げた人が、自分が苦労して調べたことだから人には教えない、調べたかったら自分で調べればいい、という状態は、決して生産的なものとは思えない。こういうことに関心を持つ人がそれぞれ別個に同じ作業を繰り返すというのは、研究の全体の水準を上げるという観点からすると、無駄な反復作業である。検索結果のデータは、調べた人だけが独占的に利用するために隠しておかれるよりも、誰もが利用できる共有財産として公開してしまった方がいい。検索結果のデータそのものは何ら作成者に固有の思想を含んでいるものではなく、誰もがそれを利用して自分の思索を産み出していくための踏み台である。これがわたしたちのフッサール・データベースの公開に込められた考えであった。[2]

このように共有財産として公開するためには、どの研究者も同じように早くアクセスでき、データを引き出せるのが一番である。自分でいろいろ複雑な検索ができるために、コンピュータのハードとソフトについての高度な学習が必

要になるようでは、興味は半減してしまう。コンピュータに慣れていない研究者でも、できるだけ簡単に素早くデータを引き出せるようにすること。そこで何らかの障害があるようであれば、共有財産として誰もが利用できるとは言えなくなる。多くの研究者がデータを得るためのハードルをできるだけ低くすること、それがわたしたちの目指したところであった。そして、それがインターネットを利用することであった。公開方法におけるアクセスのスピードこそ、インターネットの利用へとわたしたちを導いたものであった。[3]

ところが、ここで「スピード」にそれなりの意義を認めて採用した方法が、「スピード」に関わる、もう一つの利点を生むことになった。それを説明するために、もう一度、さきほどの『イデーンⅠ』で「パースペクティヴ」という語を検索するという例に立ち帰ろう。

前述のように、「パースペクティヴ」という語を検索する時、『フッサール全集』版の索引では役に立たなかったが、さいわい、4年前の1992年にシュトレーカーが編集したペーパーバックの廉価版『フッサール著作集』全8巻（Gesammelte Schriften, Felix Meiner）が出版され、その補巻にこの8巻分の事項索引が付けられている。これには、「地平」「射映」「方位」「背景」とともに、「パースペクティヴ」という項も挙げられており、この全8巻のなかに収録された『イデーンⅠ』についても、出現箇所が1ヶ所（III/1, 81）[4]記録されている。これは、少なくとも、この『著作集』全8巻に収録された巻については、とりあえず役立つものである。「とりあえず」というのは、まったく事項索引のなかった『フッサール全集』版に比べればということであり、この索引もまた、フッサール現象学の理解についての或る枠組みから作成されている、というさきほどの「索引」一般に関わる事情においては変わるものではない。のみならず、この『著作集』に収録された作品は、唯一の例外（1923/4年の講義の講義録から編集された『第一哲学』）を除いて、すべて生前に出版されたものばかりである。生前に出版されたということは、多かれ少なかれフッサール自身の手によって編集が行われ、秩序が与えられているということである。ところが、この『著作集』に収録されたものを除く、その他の『フッサール全集』の巻はすべて、生前にフッサール自身によって或る程度は編集が試みられていたものもあるが、生前未公刊で、後の研究者達によって編集されたものである。なかには、それなりのテーマと執筆年代によって分類されているとはいえ、かなり断片的な作業草稿を集めた巻もある。そして、『著作集』には収録されなかった、これらの巻こそ、「事項索引」のないことが悔やまれるものなのである。[5]

さらに、「とりあえず」役に立つ『著作集』の事項索引について、もう一つ付け加えるなら、前述のように、この事項索引は、『イデーンⅠ』の「パースペクティヴ（Perspektive）」というタームの出現箇所として1ヶ所を記録しているが、ほとんど同じような脈絡で使われている「パースペクティヴ的に（perspektivisch）」という副詞が使われている箇所（III/1, 351）は記録されていない。手抜きとは言えないが、両者の脈絡を比べてみれば密接に関連した内容を論じている箇所であり、一方を記録しながら、他方は記録しないというのは、両者について同様に情報が欲しいと思う者にとっては残念でならない。

さて、こういう状況のなかで、わたしたちのフッサール・データベースがインターネットを利用して公開されたということは、どういう意味をもっているであろうか。わたしたちのデータベースはフル・テキストのデータベースではなく検索結果のデータベースであるから、[6] 要するにコンコルダンスに過ぎないと言われるかも知れない。しかし、これまで見てきたように、コンコルダンス（索引）は、すべての単語を網羅したものではないので（そういうコンコルダンスもあるかも知れないが、例えば“er”とか“sie”の出現箇所まですべて掲載しているようなコンコルダンスは、やたら分厚いだけで使いにくいものとなろう）、何らかの解釈の枠組みをもったものとならざるを得ない。とすると、もし或るテキストを、これまで常識となってきた解釈とはまったく異なる切り口で読みたいと思うときには、これまでの解釈を前提にして作成されている事項索引ではまったく役に立たないということがありうる。これまでの解釈では重要とみなされなかったタームが突然重要なタームとして浮かび上がってくる、ということがありうる。そのとき、既成の索引であれば、なかに見当たらない時には、それで万事休す。あとは、自分でコツコツ当たるしかしようがない。

ところが、そんなとき、わたしたちのデータベースであれば、インターネットで公開された検索結果のなかに希望のタームが見つからなければ、同じインターネットの電子メール機能を使って、即刻わたしたちに連絡をしていただければよい。わたしたちには、その要望に早急に対応する用意がある。前述のように、或る巻のなかで一つのタームを検索をするのは一瞬であり（わたしたちがすでに作成している『フッサール全集』の11巻全部について検索しても、5分とかからない）、それをインターネット上のわたしたちのデータベースに追加するのも簡単なことで、すべてが10分もあればできることである。タイミングがよければ、電子メールで希望を送ってもらってから1時間以内で、新しいデータがインターネットに掲載されることになる。[7] わたしたちのデータベースは、

コンコルダンスであることは確かだが、利用者も一緒になって共有財産を増やしていくことができ、このような意味で、「生ける増殖するコンコルダンス」と呼ぶこともできる。このような双方向的なデータ送信の「スピード」こそ、インターネットの信条であり、わたしたちのデータベースはその「スピード」を積極的に利用するものと言えよう。そして、このように世界中の研究者が同じようにわたしたちの共有財産に簡単にアクセスして利用し、またその共有財産の形成に参加することができるという、この「スピード」にわたしたちはそれなりの意義を認めたいと思うのである。

さて、効能書が長くなってしまった。一昨年度に継続して行われた昨年度の作業によって追加・訂正され、新しい段階を迎えたフッサール・データベースの実際を報告することにしよう。

(1) 哲学にとってインターネットがもつ一般的な意義については、前掲拙稿「インターネットによるフッサール・データベースの公開」を参照されたい。

(2) 「情報は公開さるべきであり、共有さるべきである」、さらに、「情報公開、共有こそが民主主義を支える根幹であり、そのためのツールとしてコンピュータを使うのだ」というのがインターネットを育てた人々の精神であったことについては、古瀬幸広・廣瀬克哉『インターネットが変える世界』(岩波新書、1996年、14および45頁)を参照。

(3) その点で、後述するような、フッサール・データベースが迎えた新しい段階として、WWWのホームページが開設されたことは、一年前のMS-DOSのftpを使った方法(前掲拙稿「フッサール・データベースについて」で説明していた方法)に比べて、アクセスをいっそう簡単にすることになった。

(4) 『イデーンⅠ』の引用箇所をここでは、シューマン版の頁数で示しておく。

(5) わたしたちが最初に取り組んだ『間主観性の現象学』全3巻は、まさしくそういう性格の草稿群を集めたものである。

(6) このことについては、前掲拙稿「フッサール・データベースについて」などを参照されたい。

(7) これはいまのところわたしたちの「アフターサービス」に依存するものであるが、将来的には、利用者がリモート・ログインして自由に検索条件を指定して検索できるようにしたいと考えている。ただ、今のところ、わたしたちにその知識と技術がないだけであり、この点でご教示いただける方があれば、連絡していただきたい。

3．フッサール・データベースの新段階

（1）データの倍増

フッサール・データベースは、1994（平成6）年度に『フッサール全集』の5巻分(第11、13〜15、および16巻)についての作業が完了し、すでにインターネットを利用して公開されていたが、1995(平成7)年度には、さらに、第21〜23巻、第25巻、第27巻、および第29巻の計6巻分のテキストについての作業が完了し、1996（平成8）年4月1日に、その新しいデータが追加され、データは倍増することとなった。1995（平成7）年度に新たに底本に使ったテキストは次のものである。

Bd. XXI *Studien zur Arithmetik und Geometrie. Texte aus dem Nachlass (1886-1901),* hrsg. von Ingeborg Strohmeyer, 1983.〔『算術と幾何学の研究』〕

Bd. XXII *Aufsätze und Rezensionen (1890-1910).* Mit ergänzenden Texten, hrg. von Bernhard Rang, 1979.〔『論文と書評』〕

Bd. XXIII *Phantasie, Bildbewusstsein, Erinnerung. Zur Phänomenologie der Anschaulichen Vergegenwärtigungen. Texte aus dem Nachlass (1898-1925),* hrg. von Eduard Marbach, 1980.〔『想像、像意識、想起』〕

Bd. XXV *Aufsätze und Vorträge (1911-1921).* Mit ergänzenden Texten, hrg. von Thomas Nenon und Hans Rainer Sepp, 1987.〔『論文と講演』〕

Bd. XXVII *Aufsätze und Vorträge (1922-1937). Mit ergänzenden Texten, hrg. von Thomas Nenon und Hans Rainer Sepp,* 1989.〔『論文と講演』〕

Bd. XXIX Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie. Ergänzungsband. Texte aus dem Nachlass (1934-1937), hrg. von Reinhold N. Smid, 1993.〔『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学　補巻』〕

（2）フッサール・データベースの構造図

フッサール・データベースは、インターネットによって公開されているが、

その際、基本的には anonymous ftp という機能を主に利用している(WWW の機能の利用については後述)。そこで、公開されているフッサール・データベースの ftp における構造図を示しておこう。フッサール・データベースが登録されているディレクトリー("HUA" という略号によって表記される)は、大きく二つのサブディレクトリーから成っており、"doc" というサブディレクトリーには利用規程、利用マニュアルなどの文書が、"dat" というサブディレクトリーには検索結果のデータが登録されている。以下に、フッサール・データベースの内容をディレクトリーのツリー構造にしたがって示すが、各表題としているのは、それぞれのサブディレクトリー名・ファイル名である。また、1994(平成6)年度作成分については簡単に示し、1995(平成7)年度作成分を中心に説明を加えておく。

```
HUA
 ├doc
 │ ├japanese
 │ │ ├readme. doc ……フッサール・データベースとは?
 │ │ ├descript. doc ……フッサール・データベースについて
 │ │ ├history. doc ……フッサール・データベース作成の経過
 │ │ ├map. doc ……フッサール・データベースの構造図
 │ │ ├rules. doc ……フッサール・データベース利用規程
 │ │ ├manual. doc ……フッサール・データベース利用方法
 │ │ ├contents. doc ……現在作成されているテキスト・データベースの目次
 │ │ ├sample. doc ……テキスト・データベースからの任意の抜粋(各巻から任
 │ │ │                意の1頁分ずつ)
 │ │ ├register. doc ……検索語のリスト
 │ │ ├lists. doc ……1巻分(サンプルとして第29巻の本文と脚注と編者序
 │ │ │                文)の検索結果のリスト(出現回数のみの表示)
 │ │ ├results. doc ……サンプル語句(_einfuelung*, _leib*, _horizont*の3つ)
 │ │ │                の各巻(ただし本文のみ)における検索結果(出現箇所
 │ │ │                の頁数と行数をタイトルとともに表示)
 │ │ └texas. doc ……検索ソフト TEXAS の使用説明書
 │ └english
 │   │ ……上の "japanese" ディレクトリー内の文書の英訳(それ
```

～～～～～～～～～～　　ぞれのファイル名は同じ）

（略）

～～～～～～～～～～

└dat

├hua_11 ……『フッサール全集』第11巻についての検索結果のデータ

├hua_13 ……以下、上と同様（略）

├hua_14

├hua_15

├hua_16

├hua_21

│├inhalt. dat ……この巻の目次

│├list-t. dat……本文における検索語の出現回数のみのリスト

│├list-a. dat ……脚注における検索語の出現回数のみのリスト

│├list-e. dat ……編者序文における検索語の出現回数のみのリスト

│├einleit. dat ……編者序文における、出現回数が1回以上の検索語についての検索結果（同上）

│├a. dat ……本文における、"a" で始まり、出現回数が10回以上の検索語の検索結果（頁数と行数をタイトルとともに表示）

│├b. dat ……上と同様の、"b" で始まる検索語の検索結果

│├c. dat ……上と同様

～～～～～～～～～～

（中略）

～～～～～～～～～～

│├w.dat

│├z.dat

│├minder. dat……本文における、出現回数が1回以上10回未満の検索語についての検索結果（頁数と行数をタイトルなしで表示）

│└anmerk. dat ……脚注における、出現回数が1回以上の検索語についての検索結果（同上）

├hua_22

│　　……他は、上と同様（略）

├hua_23

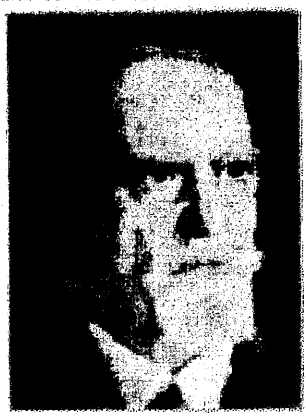
├hua_25
├hua_27
└hua_29

（3）ホームページの開設

フッサール・データベースにアクセスし、利用する方法として、一年前にはMS-DOS上でPC/TCPを使う方法で説明していた（前掲拙稿「フッサール・データベースについて」）が、この4月よりWWW上のホームページを開設した。このホームページからアクセスするのが、現在もっとも新しく簡単で便利な方法である。

WWW（World Wide Web）ブラウザ（Mosaic, McWeb, Netscape, etc.）を使って、フッサール・データベースのホームページ（URLは次の通り：http://www.ipcs.shizuoka.ac.jp/～jsshama/HUA-home.html）を開くと、下のような画面が現れるので、そこに張られたリンクを辿って入っていけばよい（ここでは下線になっているが、画面では色のついた文字などをマウスでクリックすれば、そこに書かれた内容のページに跳ぶことができる）。また、このホームページの下方に書かれたわたしの電子メールアドレスのところをクリッ

Welcome to the Husserl-Database



Go to: Japanese Version.

- Who is Edmund Husserl?
- What is Husserl-Database?
- Papers about Husserl-Database.(German)
- Links to other philosophical sites

Last Updated: 1. April, 1996
Copyright: the Japanese Project Team for bilding Husserl-Database
This page is maintained by HAMAUZU, Shinji.
jsshama@hss.shizuoka.ac.jp

クすると、わたし宛のメールを書く画面になり、メールを書いたらボタン一つでわたしのところにそのメールが届くことになる。

もちろん、従来の ftp を使った方法でアクセスすることも可能である。ftp 用プログラム (Windows 版の TCP/IP アプリケーション集である Chameleon に入っている ftp 用プログラム、あるいは、Mac の ftp 用プログラムである Fetch) を使う場合、以下のようにそれぞれの欄に入力すれば、HUA というディレクトリーに入ることができる。

Host : ftp. ipch. shizuoka. ac.jp
User ID : anonymous
Password : ********** (自分の電子メールアドレス)
Directory : /HUA

ただ、ftp を利用した場合、電子メールを送るためには、別個に電子メール用のプログラム (例えば、Eudora など) を使わねばならないことになる。

また、前記の WWW ブラウザを使っている時、静岡大学のホームページ (http : //www. shizuoka. ac.jp/) の Anonymous-FTP server とある所をクリックすると、登録されているディレクトリーが現れ、そのなかに HUA というディレクトリー名が見つかるので、そこから辿ることもできる。

(4) 1995 (平成 7) 年度に作業を行ったテキストからの任意の抜粋 (サンプルとして第 29 巻の任意の 1 頁)

初めに示すのは、検索ソフト用に加工を加えたオリジナル・テキストである。テキストのなかに見られる "_P", "_T", "_!", "_#" (ここで上げた抜粋箇所には、すべての記号が登場してはいない) は、検索ソフトのための制御記号で、それぞれ、ページ数、タイトル行、イタリックおよびゲシュペルトによる強調、ギリシア語を表示するためのものである。また、ドイツ語に特有な記号 (ウムラウトやエスツェット) は、それぞれ "a ~", "o ~", "u ~", "s ~" によって置き換えられている。

_P 78
(durch transzendentale, erschlies ~ ende Erfahrung mit transzendentaler Bildung von Erfahrungshorizonten und transzendentaler, theoretischer Bestimmung) seine eigene kategoriale Form erha ~ lt, sozu-

sagen eine Selbsterhaltung im Kategorialen u ~ bt, Welt bleibt Welt, Welt mit unbelebten Ko ~ rpern, mit Menschen, Tieren usw. Welt mit einer universalen Natur und Welt mit psychischen Wesen, die Natur erfahren und erkennen, darunter in der Welt wissenschaftlich erkennen, in weltlich-psychischen Akten. Innerhalb der Weltlichkeit ist das Weltliche immer wieder weltlich-psychisch konstituiert. Was in jeder transzendentalphilosophischen Situation, bei dem Stand ihrer entdeckenden Forschung, als transzendental erfahren, erkannt und horizonthaft umgriffen ist, ist nicht der alte _!mundus_!, sofern <er>, was als dieser in der transzendentalen Naivita ~ t gilt, einen Horizont hat von Mo ~ glichkeiten, von Erfahrungsmo ~ glichkeiten und theoretischen Mo ~ glichkeiten, einen mundaner Wissenschaftlichkeit, der nichts von dem transzendental zu Entdeckenden enthalten konnte. Aber alles nun Entdeckte nimmt die kategoriale Form "Welt" an. Aber in verschiedener Weise: die Natur bleibt immerfort weiter Natur, die Naturwissenschaft Naturwissenschaft. Wir mo ~ gen wie weit immer transzendental gekommen sein, die Sinnverwandlung der Natur a ~ ndert nichts an der Natur selbst, mag sie nun auch transzendentales Pha ~ nomen heis ~ en und im transzendentalen, universalen Horizont stehen. Was die exakt naturwissenschaftliche Forschung je erstrebt und konkret erreicht, ob vor oder nach der transzendentalen Reduktion, das liegt _!a priori_! im konstruktiven Horizont, der nie eine Verwandlung erfahren kann; die hypothetische Antizipation einer mathematisch konstruierbaren Natur bewa ~ hrt sich fortgesetzt in der exakten Methode und zeichnet ku ~ nftige Bewa ~ hrbarkeit und damit die gleiche Antizipation als rechtma ~ s ~ ige Leitung der Methode vor. Daran kann sich nichts a ~ ndern. Die A ~ nderung betrifft die Natur nur hinsichtlich ihrer subjektiven, und zwar transzendentalen Konstitution.

Ganz anders hinsichtlich des Psychischen, obschon auch dies transzendental konstituiert und mit dem Einbruch transzendentaler Forschung als das erkannt ist. Eben darum, weil sowohl das das Physische als das mundane Psychische konstituierende Transzenden-

tale notwendig die Sinngestalt Psychisches annimmt. Die Sinnver-
wandlung der "alten Welt", dessen, was wir schlechthin Welt nennen
und was in der naiv-natu～rlichen Einstellung einen abgeschlossenen

次に示すのは、検索ソフト上で同じ頁を表示したもので、各行の行頭につけられた5桁の数字は、前3桁が頁数、後2桁が行数を表す。"_!"で囲まれた強調箇所は、画面では黄色い文字で表示され(ここでは、イタリックにしておく)、FONT機能を使えば次のように独仏文字も表示される。

07801 (durch transzendentale, erschließende Erfahrung mit transzenden-
07802 taler Bildung von Erfahrungshorizonten und transzendentaler, theo-
07803 retischer Bestimmung) seine eigene kategoriale Form erhält, sozu-
07804 sagen eine Selbsterhaltung im Kategorialen übt, Welt bleibt Welt,
07805 Welt mit unbelebten Körpern, mit Menschen, Tieren usw. Welt mit
07806 einer universalen Natur und Welt mit psychischen Wesen, die Natur
07807 erfahren und erkennen, darunter in der Welt wissenschaftlich er-
07808 kennen, in weltlich-psychischen Akten. Innerhalb der Weltlichkeit
07809 ist das Weltliche immer wieder weltlich-psychisch konstituiert. Was
07810 in jeder transzendentalphilosophischen Situation, bei dem Stand ihrer
07811 entdeckenden Forschung, als transzendental erfahren, erkannt und
07812 horizonthaft umgriffen ist, ist nicht der alte *mundus,* sofern <er>,
07813 was als dieser in der transzendentalen Naivität gilt, einen Horizont
07814 hat von Möglichkeiten, von Erfahrungsmöglichkeiten und theore-
07815 tischen Möglichkeiten, einen mundaner Wissenschaftlichkeit, der
07816 nichts von dem transzendental zu Entdeckenden enthalten konnte.
07817 Aber alles nun Entdeckte nimmt die kategoriale Form "Welt" an.
07818 Aber in verschiedener Weise: die Natur bleibt immerfort weiter Natur,
07819 die Naturwissenschaft Naturwissenschaft. Wir mögen wie weit immer
07820 transzendental gekommen sein, die Sinnverwandlung der Natur
07821 ändert nichts an der Natur selbst, mag sie nun auch transzendentales
07822 Phänomen heißen und im transzendentalen, universalen Horizont
07823 stehen. Was die exakt naturwissenschaftliche Forschung je erstrebt
07824 und konkret erreicht, ob vor oder nach der transzendentalen Re-

07825 duktion, das liegt *a priori* im konstruktiven Horizont, der nie eine
07826 Verwandlung erfahren kann ; die hypothetische Antizipation einer
07827 mathematisch konstruierbaren Natur bewährt sich fortgesetzt in der
07828 exakten Methode und zeichnet künftige Bewährbarkeit und damit
07829 die gleiche Antizipation als rechtmäßige Leitung der Methode vor.
07830 Daran kann sich nichts ändern. Die Änderung betrifft die Natur
07831 nur hinsichtlich ihrer subjektiven, und zwar transzendentalen Kon-
07832 stitution.
07833 Ganz anders hinsichtlich des Psychischen, obschon auch dies tran-
07834 szendental konstituiert und mit dem Einbruch transzendentaler
07835 Forschung als das erkannt ist. Eben darum, weil sowohl das das
07836 Physische als das mundane Psychische konstituierende Transzenden-
07837 tale notwendig die Sinngestalt Psychisches annimmt. Die Sinnver-
07838 wandlung der "alten Welt", dessen, was wir schlechthin Welt nennen
07839 und was in der naiv-natürlichen Einstellung einen abgeschlossenen

（5） 1巻分の検索結果のリスト
（サンプルとして第29巻本文の "a" で始まる検索語のみ）

編者序文および脚注についても検索できるよう、本文と脚注と編者序文とを別々のデータベースとして作成している（例えば、hua_29 t は第29巻の本文、hua_29 a はその脚注、hua_29 e は同巻の編者序文をそれぞれ表す）。

以下のリストのうち、#のあとの数字はナンバリングされた集合番号、次の数字はその検索語のこの巻における出現回数、"_" は大文字・小文字を区別せずに拾う機能、"*" は前方一致で拾う機能（例えば、"_abbild*" は、"Abbild", "Abbildung", "abbildet" etc. をすべて拾う）をそれぞれ表している。

1995（平成7）年度は、466の検索語について検索を行ったが（1994年度は400語であった）、以下ではサンプルとして第29巻本文の "a" で始まる検索語の一部のみについて表示する。

≪hua_29t. IDX≫

1 : 15 : _a priori
2 : 0 : _abbild*
3 : 0 : _abschattung*
4 : 96 : _absolut*
5 : 27 : _abstraktion*
6 : 18 : _abwandlung*
7 : 2 : _ada ~ quat*
8 : 2 : _a ~ hnlichkeit*
9 : 264 : _akt*
10 : 69 : _aktiv*
11 : 65 : _aktuell*
12 : 10 : _als-ob
13 : 0 : _alter ego
14 : 85 : _an sich
15 : 13 : _analogon*
16 : 14 : _nalyse*
17 : 96 : _anderer*
18 : 10 : _anonym*
19 : 0 : _anormal*
20 : 0 : _anormalita ~ t*
21 : 46 : _anschauung*
22 : 20 : _anthropolog*
23 : 41 : _antizipation*
24 : 0 : _anzeichen
25 : 6 : _anzeige*
26 : 95 : _apodiktisch*
27 : 17 : _apodiktizita ~ t*
28 : 0 : _apparenz*
29 : 37 : _apperzeption*
30 : 5 : _apperzeptiv*
31 : 26 : _aperzipier*
32 : 2 : _appra ~ sentation*
33 : 0 : _appra ~ sentativ*
34 : 0 : _appra ~ sentier*
35 : 1 : _apprehension*
36 : 71 : _apriori
37 : 4 : _arithmetik
38 : 1 : _aspekt*
39 : 0 : _assertorisch*
40 : 5 : _assoziation*
41 : 5 : _assoziativ*
42 : 22 : _auffassung*
43 : 0 : _aufmerksamkeit*
44 : 1 : _ausdehnung*
45 : 25 : _ausdruck*
46 : 22 : _aussage*
47 : 6 : _ausschalt*
48 : 5 : _ausschaltung*
49 : 7 : _aus ~ enhorizont
50 : 0 : _axiologie

~~~~~~~~~~~~~~~~~~

(以下略)

~~~~~~~~~~~~~~~~~~

（6）サンプル語の各巻における検索結果
（サンプルとして“_horizont*”、ただし本文のみ）

サンプル語として、「地平」（Horizont）という語の、今回新たに作成された6巻における検索結果を以下に示す。#のあとの数字は、検索語につけられたナンバリングの数字、次の“items”の前の数字がこの巻における出現回数、その下に並ぶ5桁の数字のうち、前3桁は頁数を、後2桁は行数をそれぞれ表す。ただし、出現回数が1以上10未満の場合はタイトルなしの表示方式、出現回数が10以上の場合はタイトルつきの表示方式をとっている。

≪hua_21t≫
#174:S:　2 items　_horizont*
13505 31718

≪hua_22t≫
#174:S:　0 items　_horizont*

≪hua_23t≫
#174:S:　44 items　horizont*
Nr. 1
<1.
<2.
<3.
<4.
<5.
<6.
<7.
<8.
<9.
BEILAGE I
BEILAGE II
BEILAGE III
BEILAGE IV
BEILAGE V
BEILAGE VI
BEILAGE VII
BEILAGE VIII
BEILAGE IX
BEILAGE X
BEILAGE XI
BEILAGE XII
BEILAGE XIII
Nr. 2
BEILAGE XIV
BEILAGE XV
BEILAGE XVI
BEILAGE XVII
BEILAGE XVIII
BEILAGE XIX
BEILAGE XX
BEILAGE XXI
BEILAGE XXII
BEILAGE XXIII
Nr. 3
Nr. 4
Nr. 5
BEILAGE XXIV
BEILAGE XXV
BEILAGE XXVI
BEILAGE XXVII
BEILAGE XXVIII
Nr. 6

Nr. 7
BEILAGE XXIX
BEILAGE XXX
Nr. 8
Nr. 9
Nr. 10
Nr. 11
Nr. 12
Nr. 13
Nr. 14
BEILAGE XXXI
BEILAGE XXXII
BEILAGE XXXIII
BEILAGE XXXIV
BEILAGE XXXV
Nr. 15
BEILAGE XXXVI
BEILAGE XXXVII
BEILAGE XXXVIII
BEILAGE XXXIX
BEILAGE XL
BEILAGE XLI
BEILAGE XLII
BEILAGE XLIII
BEILAGE XLIV
BEILAGE XLV
BEILAGE XLVI
BEILAGE XLVII
BEILAGE XLVIII
Nr. 16
BEILAGE XLIX
BEILAGE L
BEILAGE LI
Nr. 17
BEILAGE LII
BEILAGE LIII
BEILAGE LIV
BEILAGE LV
Nr. 18 51034 51418 52218 52238
BEILAGE LVI 52704 53236 53240
BEILAGE LVII 53311 53313 53517 53531 53532
BEILAGE LVIII
BEILAGE LIX
BEILAGE LX 54508
Nr. 19 55121 55129 55130 55133 55234 56115 56129 56138 56201 56207 56207 56222 56223 56404
BEILAGE LXI
BEILAGE LXII
BEILAGE LXIII
Nr. 20 58027 58127 58520 58607 58621 58622 58720 58724 58727 58732 58801 58804 58806 58808 58814
BEILAGE LXIV
BEILAGE LXV 59306 59307

≪hua_25t≫
#174:S: 24 items _horizont*
PHILOSOPHIE ALS .....
00434
<I
<II 05017 05437 05438
VORWORT (1)
VORWORT (2)
VORWORT (4)
DIE REINE .....
PHA ~ NOM. UND PSYCHO.
PHA ~ NOM. UND ERKENNT.

<I
<II
<III 15208 15220
<IV 18133 18133 18402
18905 20030
BEILAGE I
BEILAGE II
BEILAGE III
BEILAGE IV 21107 21229 21233
21238 21240 21244
21303 21311 21423
21736
BEILAGE V 22318
ANHANG 23114
BEILAGE VI
BEILAGE VII
BEILAGE VIII
FICHTES .....
BEILAGE IX
BEILAGE X
REINACH (1917)
REINACH (1918) 30114
ERINNERUNGEN .....
NATUR UND GEIST
BEILAGE XI
BEILAGE XII
BEILAGE XIII

≪hua_27t≫
#174:S: 44 items _horizont*
FU ~ NF AUFSA ~ TZE.....
Erneuerung 00536
Die Methode.....
Erneuerung als.....
Erneuerung und.....
05017 05537 05604
Formale Typen.....
BEILAGE I 09507
BEILAGE II
BEILAGE III 09735 09903 09912
09913 10009 10012
BEILAGE IV 10246
BEILACE V
BEILAGE VI
BEILAGE VII
BEILAGE VIII
BEILAGE IX
BEILAGE X
BEILAGE XI
U ~ BER DIE REDEN BUDDHOS
12514
DIE PHA ~ NOMENOLOGIE UND
EUCKEN
U ~ BER URSPRUNG 14027
BEILAGE XII
BEILAGE XIII 14519 14523 14530
14629 14634 14636
14644 14647 14711
14714 14717 15601
15644 15740 15830
15908 15929 16105
16118
PHA ~ NOMENOLOGIE UND ANTH-
ROPOLOGIE
VORWORT zu Fink
U ~ BER DIE GEGENWA ~ RTIGE .....
19126 19824 20614
21915
BEILAGE XIV
BEILAGE XV 22738 22738
BEILAGE XVI
BEILAGE XVII 23136
BEILAGE XVIII 23622
BEILAGE XIX 23644 23808

BEILAGE XX
AN DEN PRA ~ SIDENTEN .....
24423
SELBSTDARSTELLUNG .....

≪hua_29t≫
#174:S: 241 items _horizont*
I.
NR. 1 00401 00426 00605 00611 00614 00628 00712
NR. 2
NR. 3 03213 03425
NR. 4 03805 03834 03904 03906 04508 04511 04605
NR. 5 04712 04713 04718 05115 05203
NR. 6 06029 06128 06213 06214 06223 06232 06234 06332 06422 06527 06705 06814 07101 07130 07135 07138 07202 07503 07507 07511 07511 07512 07515 07522
NR. 7 07716 07812 07813 07822 07825 07901 07901 07907 07934 07936 07938 08004 08009 08010 08107 08108 08211 08217 08226 08306 08312
NR. 8 08531 08536 08610 08613 08632 08633 08633 08634 08702 08707 08709 08710 08712 08720 08721 08724 08734 08736 08737 08738 08804 08809 08815 08816 08818 08819 08823 08834 08912 08913 08927
NR. 9
II.
NR. 10 13004
NR. 11 14427 15634
NR. 12
NR. 13 17006 17011 17222 17432 17614 17939
NR. 14
NR. 15 19108 19203 19934 20003 20010 20020 20023 20026 20210
NR. 16 20325 20409 20423 20429 20507 20520 20524 20529 20603 20622 20623 20633 20831 20835 20901 20902 20906 20909 20921 20924 21312
NR. 17
NR. 18 21713 21835
NR. 19
NR. 20
NR. 21 22909 22911 22918 23031 23127 23219 23332 23414 23512 23518 23617 23624 23718 23724 23836 24312
III.
NR. 22 24933 24936 25013 25017 25023 25127 25130 25131 25131 25133 25235 25333 25337 25436 25507 25528 25610 25714 25938 26229 26319 26321 26410 26428 26429 26436 26501 26512 26521 26839 26937 27028
NR. 23
NR. 24 28101 28606 28737 28738
NR. 25 30033
NR. 26 30215 30217 30220 30227 30228 30306 30624 30727 30729 30802 30803 30807 30808 30831 30917 31013 31034 31106 31129 31133 31409 31413 31420 31503 31527 31529 31532
NR. 27
NR. 28 32316 32409 32611 32612 33001

33323 33724 33727 33728
NR. 29 33919
IV.
NR. 30 34415 34633 34639 34803
NR. 31
NR. 32 36208 37116 37224 37401 38024
38220 38509 38517 38520
NR. 33
NR. 34

おわりに

山登りをする時、自分の足で一歩一歩山頂までの道のりを辿ることには確かに意味がある。それをヘリコプターで山頂まで連れていってくれると言われても、それでは山登りの意味は失われてしまおう。しかし、目的が山登りそのものではなく、例えば山頂にある天文台で宇宙の天体を観測することにあるとしたら、どうだろうか。自分の足で登っていたら、宇宙観測の時間がなくなる(重大な瞬間の観測ができなくなる) としたら、ヘリコプターで早く山頂に着くことにもそれなりの意味があろう。——わたしたち哲学する者、あるいは控えめに言って、哲学を研究する者にとって、コンピュータやインターネットを使った「スピード」がもつ意義は何かそのようなことにあるように思われるのである。